五島誠議員による「教育のまち庄原」および「芸備線存続」に関する一般質問

議長（桂藤和夫）　休憩前に引き続き会議を再開します。次の質問に移ります。　五島誠議員。

五島誠議員 9 番、会派 NEXT、五島でございます。 議長の許可をいただきましたので、通告に基づき一般質問を始めさせていただきます。私は今回、大綱 2 項目にわたって質問を展開してまいりたいと思っております。その中でも「教育のまち庄原へ向けて」ということで、1 番と 2 番に分けて市長、教育長にそれぞれ質問してまいります。

会派 NEXT では、令和 8 年予算編成に対する要望の 1 点目として、教育環境整備を子供たちと家族、地域の方と一緒に検討していくこと、例えば統合を進めると同時に小規模特認校や不登校特例校、こちらは今「学びの多様化学校」という正式な呼び名になっておりますが、そうしたものの設置なども検討することであったり、部活動についても集約化やさらなる民間移行、あるいは寮の整備なども合わせて行っていくことなど、ありとあらゆる手段で本市の教育環境の持続化のみならず魅力化も検討することという要望をさせていただいたところでございます。

一方、不登校数の増加やいじめ問題、教員の過重労働問題と日本特有の課題であるという結果からも、この日本の教育にうまくいっていない点が多くあるというのも、これは事実であるという風に思っております。これについても抜本的に見直していかなければならない岐路に立っていると考えております。

そうした中で、有名なところで言いますと庄原英学校を始め古くからこの教育というものに力を入れてきたこの庄原市でございますけれども、改めて「教育のまち庄原市」として本市の教育環境の持続化、魅力化について今までの常識を捨ててでも取り組んでいき、教育日本一のまちを市民の皆様と共に作り上げていくべきではないかと考えますが、所見を伺いたいと思います。以降の質問につきましては質問席から行います。

教育のまち庄原の持続化・魅力化について

教育長（牧原明人）　ご質問にお答えします。 あらゆる分野の力の源泉は人であり、まちづくりの源泉も人です。教育はその人を育てる人材育成を始め、ふるさと庄原を支え動かすエンジンの役割を担っており、その取り組みが将来を担う子供たちの持っている能力や個性を開花させ、また市民の皆様のやりがいや生きがいを育み、社会の発展につながる基盤となります。

これまで本市においては、庄原の学びや体験がいつどこにいてもどのような状況にあっても、そのことが心の支えとなり原動力となる内容を作り、取り組みを進めてきているところです。特に子供たちには、豊かな心を土台として知力や体力、コミュニケーション能力や情報活用能力などの向上を始め、ふるさと愛の醸成や求められている資質能力の育成など、主体的・対話的で深い学びの実践に努めてきています。

こうした取り組みを通して進路実現に向けて自己目標を達成できる力をつけることや、読

書推進、体力向上などの成果は出てきていますが、議員ご指摘のように実態として本市においても不登校児童生徒数が増えてきていることや、スマホの使い方、教員の働き方改革に伴う勤務のありよう、授業改善のこと、部活動の地域移行のことなど課題があります。これらの課題解決を図るとともに、とりわけ児童生徒数の激減状況に関連する影響を考慮した時、将来を見据えた教育環境づくりや庄原で学びたいと思える教育の創造、そして質の向上に向けた実践をさらに積み重ねていく必要があります。何よりも大切なのは、将来を担う子供たちにたくましく生き抜く力を育み、市全体の教育力を高めていくことが肝心です。今後も高い目標に向かって学校、家庭、地域の皆様方の熱い思いとともに歩み続け、その使命を果たすべく庄原で学んでよかった、庄原で学びたいと思えるような教育の創造に全力で取り組んでまいります。

五島誠議員 答弁の中でも明らかなように、この質問をするにあたって私と教育長、あるいは市長、そしてここにいる多くの皆様と考え方、理念という部分について大きな隔たりはないという風に思っております。それを実現する方法についてじゃあどうしていくのかというところが、やはりこれから我々がもっともっと具体的に考えていかなければならない部分だろうという風に思っております。

そうした中で、会派 NEXT でこうした要望をさせていただいた背景、あるいは今回こうした一般質問を私がさせていただいた背景には、やはり新しい市長に変わられまして、そしてその市長選挙の時に八谷市長がおっしゃっておられました「つなぐ、未来へつなぐ」。その１項目目が「世代をつなぐ」ということで、子育て支援、そして教育環境に力を入れていくということが１丁目１番地として書かれておったわけでございます。その具現化をどうしていくのかというところが今回の質問のまさに肝であるという風に思っております。教育長も日頃から市長とコミュニケーションを取られ、特に市長は総合教育会議を主催する方でもございますので、そうした会議、あるいは様々な場面を通じて市長の考えというのは教育長の考えと一緒だという風に思っておりますので、教育長にそうした市長の公約実現の具現化についてお伺いをしたいと思います。

教育長（牧原明人） 当然、平素より市長といろんな教育の話、あるいは教育環境をどう整えていくかという話はしております。そのもとに基づいて平素の教育の取り組み、実践を着実に前に進めていくということで、子供の関係で言えば特に学校関係者、また市民の皆様のことで言えば生涯学習、あるいはスポーツ、芸術文化推進、各団体競技なども含めて進めているところであります。

五島誠議員 市長の公約の中で子育て支援、それから教育環境の充実というところが挙げられております。これをどうでは実現に向かって具体化をしていくのかということがこの質問の肝でございまして、他方、市長と教育長は総合教育会議を通じて、あるいは様々な場面で考えを一つにしてこれからもやっていかれるという風に思っておりますので、そうした市長が掲げられた公約実現をするということは、教育長にとってもまさに同一歩調であるという風に考えましたので、教育長に改めて市長の公約実現についてお伺いをしてい

るものでございます。
教育長（牧原明人） もちろん市長と協議を深める中で、当然教育独自で考えていく面もありますけれども、そこは教育委員、教育委員会議、うちは最高議決機関でございますけども、そういったことも意見を聞きながら、市長と協議を絶えず行いながら、今節目である総合教育会議にもそれは提示し、あるいは色んな意見も述べることによって共有化をしながら、どういった教育を充実していくかということについては日頃より取り組みを重ねているということでございます。
五島誠議員 その中で、先ほど教育長冒頭の答弁でもおっしゃったように、不登校のところなどについてやはり課題も大きく感じていらっしゃるということを答弁の中でいただいたわけですけれども。
昨日も谷口議員の一般質問の中で不登校について取り上げて質問がなされておりました。私も昨年までは教育民生常任委員会の方に所属をさせていただいておりまして、この課題を所管事務調査として閉会中も継続して調査をしてきた経緯もございます。そうしたいろんな議論を重ねていく中で、一つ私が感じているところとしては、この不登校の課題というところに、不登校になった子供にある種フォーカスが当たっていると言いますか。
その一番分かりやすい例で言うと、例えば不登校になった子が「元気になったらまた学校に通ってね」っていうこのセリフだという風に思うんですよね。「元気になったらまた学校に通ってね」というのは、子供に原因があるという風に捉えれるとも言えるわけです。
で、なった時に、その子供の状況が変わって学校に行けるようになりました。でも学校は、社会は変わっていなければまた同じことが繰り返されるという風に思うわけです。だから、ここで本当に考えなければならないのは、子供たちのことを考えて我々大人が、社会が、そして学校が変わっていくこと、教育環境が変わっていくことこそがまさに一番大きな様々な課題への対応だという風に考えております。そうした中で見解をもう一度いただきたいと思います。
教育指導課長 ご質問にお答えをいたします。 不登校に関わることですが、本市の教育理念としましては先ほど教育長も答弁で申し上げた通り、ふるさとの学びを原動力として高い志を持ち続け活躍できる人材の育成を目指して、様々な取り組みを展開しております。その中で将来社会の中で活躍し、庄原で学んでよかった、庄原で学びたい、そう思えるようなふるさとの学びが原動力となるような教育を作っていく。まさにそういった取り組みをこれまでも行ってきていますし、引き続き新たな取り組みも様々に工夫をしながら創造していくという状況でございます。
そういう中で子供にとってやはり学校が楽しい、学びたい、友達と一緒に生活をしたい、そういった場であるべきで、そういった学校教育を作っているという状況です。しかしながら昨日の質問に対して答弁した通り、それぞれの子供たちがいろんな受け止めをする中で背景、あるいは要因が様々であり、そういった中で不登校傾向になったり、あるいは結果として不登校という状況になる場合もあります。

ただし、学校はそういった子供たち一人一人の思いをしっかり受け止めながら、どういった対応が必要なのか、どういった要因でそうなっているのかといったところに寄り添いながら、子供にとってまた次への新たな気力であるとか活力につながるような取り組みをしていく。まさに不登校の状況になった子供たちに対しては、しっかり支援指導していくということはこれまでも必要だという風に思いますし、そういった対応を今後も想定をしながらやっていく必要があるという風に思っております。
繰り返しになりますが、学校に子供たちにとって本当に学校へ行くことが喜びとなり、そういった学んだ力が将来的に繋がっていく取り組みを学校教育としては義務教育の中でしっかりやっていく、そして 15 歳になった時には自分自らで進路を選択していく力がつけれるように、引き続き取り組んでいくことが必要だという風に感じております。
五島誠議員 なかなかこれ概念的な部分もあるのでちょっと伝わりにくいところもあるかも分からんのですけれど。本当にそれぞれの不登校の原因とかそういうケースについて今問うているわけではなくて、当然そのケース一つ一つしっかりと対応していくことはもちろん大事だし、そのことを否定するわけではなくて、そうではなくてシステムの部分、あるいは教育環境の部分を抜本的に考えていかないと、今後もこうした課題というのはそれぞれいろんな理由はあったにしても出てくるわけでございまして。
だからこそ変えなければならないのは社会であり学校であり、それは何かをやったからすぐ解決するよということではなくて、長い年月を積み重ねてしっかり作っていく、我々大人が作っていかなければならない、それは責務だという風に思ってます。だからそのケースではなくて、教育環境そのものを改革というか見直していく必要があるんではないかということで質問させていただいているので、改めて答弁をいただきたい。
教育長（牧原明人） 学校の教育環境や社会のシステムを変えるというのはなかなかこれは難しいという状況にございます。ケースではないと言われたんですが、これは顕著な例になるかと思うのでちょっと紹介しますけれども。
例えば今日の子供たちが不登校になるケース、先ほど課長が言いましたように様々なケースがあります。個々あります。なかなか一概には言えません。ですが、顕著な例としてスマホあるいはゲームをすることによって昼夜が逆転したということによって、なかなか朝起きにくいという例がございます。そのことが原因で不登校になったという例もあります。その時、ではスマホを全く使わない社会にするのかであるとか、ゲームを全くしないというようなことが果たしてできるのか。一方的な言い方はできませんが、ルールを持つということはできるかと思います。
じゃあルールを徹底的に守らすことができるのか。これは家庭教育であります。そういったところが相まって子供をどう育てるかという共通認識を持たなくちゃいけません。このことについて先日 PTA の会長さんたちに私の話を聞いていただく機会を持ちました。その時に紹介したのは、そういうスマホのみならず、もちろんそのことのルール化しますけれども、それに代わる喜びがある、楽しみを家族で見つければそこに転化してスマホを使

わなくなったという実例がありますということを紹介しました。例えば読書をする、あるいは家族揃って体験活動をする、そういったことによってスマホをできるだけ減じていくというような例も紹介しました。
つまり一つ一つそういったケースも踏まえながら、どうやることが子供を育てることに、子供が将来自立して社会でたくましく生き抜いていけるのかという力をつけていくことができるのかを家庭も学校もさらには地域の皆さんと共に考えていけることができれば、一歩ずつ階段を登って前に進むんではないかという風に思っています。
五島誠議員 なかなかうまく伝えるのは難しいなという風には思っておりますけれど。今不登校の話をさせていただきましたけれど、この不登校に限らず教員の働き方の課題であるとか様々な教育現場に課題があるというのも事実ということで、答弁の中にもおっしゃっていただいたという風に思っております。
なのでこちらをですね、要は一つ一つのものをしっかり見ていくってこともちろん大事だし、なんだけれどもやっぱり今この冒頭のこの質問の中にも書かせていただいているように、これは抜本的にこの教育現場というものをですね、見直していく岐路に立ってるんじゃないかなという風に私は思っています。これは様々な意見の相違もあろうかという風に思いますけれど、また引き続き議論を重ねてまいりたいという風に思っておりますが。
何よりもこうした課題があるということでそれを対処療法的にやっていくんではなくて、やっぱりそこ自らに矢印を向け大人が、社会が、そして学校がどう変わっていけるかということ。それがひいてはこの町の「教育のまち庄原」の実現に近づいていくことだという風に思っておりますし、やはり先ほどあったようにこの庄原で学びたいと選んでいただけるそうした土壌作りになっていくものと私は思っておりますので、引き続き議論させていただきます。続いて２番の質問に行きます。

教育移住の取り組みと私立学校開設に伴う事象への対応

五島誠議員 ２番の質問は市長に対して質問をさせていただきます。 教育移住の取り組みを進めるために、私立学校開設ありましたね、庄原こどもの夢学園、こちらの開設などに伴う事象にもしっかりと注視をしつつ、プロジェクトチームなどの市役所の横断的対応によって情報共有や空き家、お試し拠点施設などの整備を行うことによって、先ほどの質問にありましたけれど機会損失、こちらが出ないようにしっかりと取り組んでいくことが必要だという風に考えます。教育で選ばれるまちづくりを進めることが未来へつなぐ大きな希望になると考えますが、市長の所見をいただきたい。
市長（八谷恭介） ご質問にお答えいたします。 本年４月に学校法人庄原こどもの夢学園が「川北こどもの夢小学校」を開校されたことに伴い、この学校で学ばせたいという方々から住まいや移住に関するお問い合わせが多く寄せられており、本市のまちづくりにおいても可能性を感じております。市はこうした移住希望の声を大切にしながら、定住促進や地域活性化などにつなげていく必要があると考えております。

そのため移住定住トータルサポート窓口による相談対応や情報提供、庄原暮らしお試し体験施設の提供などこれまでの支援を継続しつつ、自治振興区による移住者獲得の取り組みに対して、地域おこし協力隊や地域マネージャーの設置など既存の制度を活用した受け入れ態勢強化のための支援も行っております。
今後とも市全体の移住施策を幅広く推進するとともに、地域による取り組みも支援しながら、多様な移住希望者の皆様に選ばれるまちづくりを進めてまいります。
五島誠議員　午前中の質問等でもありましたけれど、今もう様々な移住、この定住政策につきましては行ってらっしゃっるという風に思います。しかしながら現実としてお伺いをする中では、例えば来年度もこの希望の方がすでにいらっしゃるんだけれども、なかなか住むところがマッチングしないために、なかなかうまく話がまとまらないこともあるということも事例の中でお伺いをしております。これこそまさに勿体ない話でございまして。
今この庄原市全体を見返した時に、こうして固まって移住定住が見込める、そして希望があるそうした部分というのはまさにこの教育移住の部分だという風に思っておりますけれど、つまりは今の中でもまだもう少し取り組みが必要であるということが事実なわけでございまして、じゃあどうしますかということをお伺いをしております。改めて答弁をいただきたい。
自治定住課長　ご質問にお答えをいたします。議員ご指摘のように教育移住につきましては本市への非常に関心が高まっている事象でございます。教育移住によりまして地域行事への参加をいただいたりすることで地域の活性化などにも繋がっておることかと思っております。
市としましては、先ほども答弁にありましたように、いろいろなトータルサポート窓口での相談対応でありますとか、移住定住にかかる各種補助制度、また庄原暮らし体験施設の提供などの支援を行っております。そして、受け入れにあたりましては自治振興区によります取り組みも進んでおりまして、そうしたところで地域おこし協力隊、地域マネージャーなどの設置による受け入れ態勢の強化も行っておる処でございます。
今後におきましても自治振興区や各関係機関と連携をしながら、移住定住におけるこうした機会損失が出ないようにしっかりと取り組んでまいりたいと考えております。
五島誠議員　私が求めるのはさらにもう一歩踏み込んだ対応が必要なのではないかということを申し上げさせていただいております。

市長になられる前の後援会のリーフレット拝見させていただきますと、専門学校あるいは私立学校、大学などとしっかりと連携をして、選ばれるまち庄原、教育で選ばれるまちを具現化していきたいというようなことが、これは言わば市民の皆様に対するお約束だという風に思うんですよね。そうしたものがある中で、じゃあそれをどういう風に具体化をしていくのか。これから何を変えていくのか、何をまだまだやらなくちゃいけないのかということが、この質問の中で伺いたい本質の部分でございますので、改めて答弁をいただき

たい。
企画振興部長 ご質問にお答えをいたします。 市長就任後、所信表明等で述べられてきたものにつきましては、第3期の長期総合計画の方向性の中にしっかりと組み入れているところでございます。目指すべき将来像、安心な暮らしが充実し、庄原に関わる人の未来が繋がっていくまち。そして、それを実現するための3本の柱として、安心な暮らしの充実、成長戦略、そしてその二つを支える人的資源の育成ということで、それぞれ体系的に施策を取りまとめております。
その中で、人的資源の育成で言いますと、1問目のテーマにもなっておりました教育。この教育は義務教育にとどまらず、幼児教育から高等教育まで一気通貫のまちづくりと重なる教育ということで、取り組みを進めていきたいという風に考えております。具体的なものにつきましては、新年度予算の中におきまして、そうしたカラーが出ていくような形で整理をしてまいりたいと考えております。
五島誠議員 具体的なものについては新年度予算を見てくれということでございまして、ここではこの一般質問の中では明らかにされないということが明らかになりましたので、この質問を閉じて次の質問に移りたいと思います。

JR芸備線の存続と地域づくりについて

五島誠議員 2番目の質問といたしまして、JR芸備線存続へ向けてと題しまして、質問をさせていただきたいと思います。 現在、再構築協議会により実証事業を行っているところでございますけれど、地域の皆様や行政職員の皆様必死に取り組んでいただいております。
JR芸備線存続のため、乗車人数増加への取り組みにとどまらず、権利ビジネスであるとかクラウドファンディング、色んな様々な機会を通してこの芸備線そのものの価値を表面化させる事業に取り組んでいかなければならないという風に私考えております。
また、国土強靭化の観点から国のスタンスをしっかりと明らかにしていただき、積極的な関与を促すことも必要という風に、これは従来から申し上げさせていただいているところでございます。市として覚悟を持って存続に向けた取り組みを今後どのように行っていくのか。また、実証事業の進捗と課題、今後の展望について所見を伺うものでございます。
市長（八谷恭介） ご質問にお答えいたします。 芸備線再構築協議会の実証事業につきましては、地域経済効果などを確認するために有効と考えられる施策に取り組んでおりますが、権利ビジネスなどの投資寄附と連携した施策は、単年度での効果測定が困難などの理由から、その実施に至っていないところでございます。
また、国に対しては中立的な立場で芸備線再構築の議論を促すことに留まらず、国土の均衡ある発展や地方創生の観点から、国の責任において鉄道ネットワークの維持に向けた施策を講じるよう、全国市長会を通じた要望など様々な場面を通じて国の主体的な関与を求めております。
実証事業では、臨時列車の運行やダイヤ変更を始め、駅から観光地を結ぶシャトルバスの

運行や観光ツアーなどの施策を実施する中で、地域経済効果に加え、芸備線の多様な価値と潜在需要の掘り起こしに取り組んでいるところでございます。一方、実証事業のキャッチフレーズを「自然、美味、神話の宝庫、芸備線」としておりますが、これまでの取り組みでは自然や食など本市ならではの魅力を十分に打ち出せていないと感じております。
冬季の臨時列車の運行が始まった中、本市といたしましては、これまでの施策に対する利用者や関係者の意見に耳を傾け、柔軟に内容をアレンジしながら取り組みを進めてまいりたいと考えております。協議会で示されたスケジュール案では、来年度も芸備線の可能性を最大限追求する実証事業が実施されることになっており、引き続き事業の目的が達成できるよう、地域経済の活性化のほか、利用者数や運賃収入で測ることのできない多様な価値を創造するという視点を持ちながら、再構築協議会の議論に臨み、芸備線の維持存続に取り組んでまいります。
五島誠議員　まずですね、ちょっとこれだけは確認しておかないといけないかなという風に思うのが、実証事業Ａ と Ｂ がありまして、今Ａが行われておる最中でございますけれど、このＡを議員全員協議会等の場のなかでも、延長に向けて期間をもう少し長くしていただきたいというような意見を課長おっしゃってたという風に思っておりますけれど、それがその後どのような議論の経過がなってどういう風になったのかということは確認の意味で聞いておきたいと思います。
地域交通課長　ご質問にお答えいたします。実証事業Ａの取り組みでございます。これにつきまして本年度再構築協議会の実証事業ということで７月から始まっております。現在取り組みを進めておるところでありまして、今年度については取り組みを進めて参り、来年度でございます。来年度におきましても、現時点で事務局から示されたスケジュール案によりますと、この実証事業Ａにつきましては４月から３ヶ月間実施されるということになっております。
五島誠議員　この実証事業というのがですね、決まってから実施まで非常にタイトなスケジュールで、しかも期間も先ほどあったように７月から本来やったら３月末までかなというところで、１年も無いような実証事業で、それで要は１年なかったら季節が全部１年通して無いわけでございまして。それではなかなか実証事業としても成立してないねという意見もありましたので、それが少し３ヶ月延長になり１年間という期間になったということは少し安心をしておりますけれど。
ただ、このそもそもの実証事業のあり方ということで、これがですね、皆様もご存知の通り、そのように考えられてると思いますけれど、これが要は言い方は悪いですけれど、やめるための布石になるようではいけないというところが、ここは本当に肝に銘じると言いますか、そこは頑ななまでに維持しながらですね、やっていかなければならない部分だという風に思っております。そもそもですね、正確な計算ができるわけではありませんけれども、芸備線例えば庄原から東城間、どこ区間でもいいんですけれど、満杯で乗ったとしてもたくさん利益が出るわけ、そういう区間なわけではない。むしろ赤字な区間でござい

ます。
だからこそ乗った人数だったり、要は単純な乗った収益では図れない部分というのがやっぱり非常に大切な部分だという風に思っております。

[35:47]
そうした中で、私ですね、先日、これは初めてなんですけど、一人で、しかもどこか目的があって行くわけではなくて、「芸備線に乗る」ということを目的に、旅と言うのが言い方が正しいかわからんですけれども、乗らせていただきました。 平日の 1 時 30 分台の便で行かせていただいたわけなんです。 で、実は私、家から備後庄原駅ってだいたい 15 分ぐらいかかるところでございまして、駅まで車で行かんと、そもそも列車に乗れないっていうような地域に住んでおるものでございます。 まあお恥ずかしながら、なかなか芸備線利用をこれまでしてきたかというと、そうではない人間でございます。 まあそして地域の人間。 これは庄原市内に多く、僕みたいな方はいらっしゃるというふうに思いますので、僕みたいなところに住んでいる人間が乗ってみてどうだったかというようなお話を少し紹介をさせていただいて、質問を展開していきたいというふうに思っています。 1 時 30 分台の便に乗りまして、備後庄原駅になるので、だいたい 1 時 20 分ぐらいに、やっぱちょっと心配なので少し早めに行きまして、まずですね、単純な話で言いますと、どこへ車を止めりゃええんだったっけ？っていうところからまず分かんないです、恥ずかしい話ですけれどもね。 で、まあなんとか、あ、そうだ向こうのあそこだというところで止めて、歩いて行きまして、切符を買います。 券売機はありませんもちろんね。券売所があるだけだから。 で、そこですみませーんて言いながら、東城まで行きたいんですけどって言ったら、気持ちよく対応していただいて。 で、切符をいただいて、改札をくぐって、いざホームに行くんだけれども、初めて乗ったわけじゃないから分かるのは分かるんですよ、分かるけど、いざ一人で備後落合行き、どっち乗ればよかったっけ？と思うわけですよね。
で、ああ、向こうだよねと思って、向こう側に行くと、やっぱり駅もホームなんかも古いので、文字もなかなか擦れていると言いますか、ほんま、ここに立っとって車は来るんかいなとか思いながらですね、ちょっと不安な気持ち、まあただそうこうすれば放送がありまして、3 番乗り場に備後落合行きはまもなく到着いたしますということでありましたので、あ、よかったと思って。 まずそこから実は、難しいんですよ、ハードルがあるんですよ。 だから駅舎はきれいになったけど、駅のホームだったり、そのレトロな雰囲気は残しながら、庄原市が勝手にできるものじゃないんだけれども、まずはそうしたところももう少し考えたほうがいいんじゃないかなというふうに思うんですけども、ご所見をいただきたいと思います。 **地域交通課長** ご質問にお答えいたします。 議員おっしゃられるように、備後庄原駅等につきましては、JR から無償譲渡いただく中で一定の整備をさせていただいておるわけでございますけれども、ただホーム側に入りますとこれは JR さんの所管ということで、我々ではなかなかすぐに修繕したり改善したりできるもんではないという

ところはあるんですけれども、しかしながら利用者目線というところは重要だということも思っております。 これに関しましては、JR 西日本と年に 1 回はこうした施設改善の意見交換の場を持っております。 こうしたところの中でも、施設の改善等については求めていっておりますので、そうした声は地元の自治体からも届けているというようなところでございます。 **五島誠議員** こうして一つ一つを見ながら、価値を高めることをやる、それは実証事業でやることもそうだけれども、庄原市として、様々な活用の仕方も含めて検討することは必要だというふうに思います。 続けます。乗ります。一人ですよ。 平日の昼間、1 時 30 分台にも関わらず、僕は芸備線一人でした。 ただその時すでに、7 名の方が乗車をされていました。 で、そのうち 3 名の方は、小脇になんかたいそう立派なカメラを抱えられてる方もいらっしゃったり、携帯で写真風景を撮っておられる方もいらっしゃったりということで、まああの、そうはいっても広い車内に僕入れて 8 名なので、まあ結構ゆったりと座っていけるわけでございますよ。 で、正直乗った方が知り合いでもおったらとか思ったんですけど、知ってる方は一人もいらっしゃらなかったので、私も一人で席に座りまして、足なんか組んでみたりしてですね、ちょっとこの窓のところに手を乗せたりしてみてですね、こう一人でこう、なんかこう、もの思いにふけるわけでございますよね。 で、ぱっと見ますと、ご存知の通り庄原から発車するのって、はっきり言って道に結構沿ってるんで、見たことがある景色なんだけれども、これが列車から見るとまた景色が違って見えると言いますか。 で、ちょっとなんとなくフィルターがかかったような感じがして、ちょっとノスタルジックな雰囲気もあったりする中で、それをこう、もの思いにふけったような顔をして、ちょっとかっこつけてね、乗ってる景色を眺めてる風をするんですけども、何かを見るということでもなく、なんとなくこう景色を楽しみながら、そこはすごく色んな思いが駆け巡るわけでございまして、ああ、今日はこうやって一人で乗らせていただいてるけど、寂しくないな、そうだ娘が今日は帰ってくるんだ、何を食べさせようかみたいな、わけのわからないこのストーリーがですね、なぜか頭の中に巡るわけなんですよね。 これも不思議な体験でした。 まあそれを紹介してどうなんだということは、これ実は後ほど聞いてくるんですけれども、ていうような体験で、ただ乗ってるだけなんだけれども、すごく面白くて、なんか今まで何人かと一人で乗るの寂しいと思ってたし、なかなか目的が何もないの乗るのなんて面白くないと思ってたんです。 だけど、これおすすめしたい。 一人で目的もなく列車に乗ることってめちゃくちゃ面白くて、ストーリーが本当に頭の中に浮かんでくるんです。 今までは絵画コンテストとか写真コンテストも色々あったと思うけど、もう 1 つ、文芸コンテストとか絶対やるべきだと。 それぞれにそれぞれのストーリーがあると思いますし、いつかどこか、誰かに聞いたことがあるようなフレーズがどんどん巡ってくると思うんですけども、それをこの心地よい揺れと景色と、なんとなくのこの雰囲気の中で感じていただくと、いやまさに「文芸のまち庄原」、そうした観点もですね、この芸備線の価値としてあるんではないかなというふうに思っておりますが、所見をいただきたいと思います。 **地域交通課長** ご質問にお答えいたしま

す。 先ほど議員さんから芸備線に乗った感想と、文芸コンテストというようなことのご提案をいただきました。 これをすぐにこの場でじゃあやってみましょうということはなかなかできないということはご理解をいただければというふうに思いますけれども、ただし、芸備線の可能性を、まあいろんな可能性を探っていくというところの中でですね、一つの手法だというふうに思いますので、これについては他の沿線の自治体、あるいは他の路線の状況を見ながら、調査の方をさせていただければというふうに考えております。 **五島誠議員** 残り 7 分です。 実はまだ僕の中で西城ぐらいまでしか行ってなくて、おい東城まで行けるんかなっていうところあるんですけれども、これでまあ、ちょっとそうは言いましても時間もありますし、一般質問ですので端折らせていただきますけれども、今度ですね、備後落合駅の話をさせていただきたいと。 備後落合駅に到着いたしました。まあ小 1 時間かかるんですよね。 で、到着しまして、その時に、それまで時雨てたんですけども若干ですね、雪に変わって、また気持ちがね、ちょっと変わってくる。 てなった時に、備後落合駅、もう皆さんご存知の通り、この時間帯 2 時 30 分頃になりますと、3 つの列車が落ち合うということでございまして、まあちょうどその場面に遭遇することができたわけでございます。 で、芸備線だけではなくて木次線のほうも来るわけでございますけれど、そこではですね、市役所の職員のような方がガイドっぽいことをして、こんななんか何人かのツアーみたいなことなのかな、そうしたものをやったり、木次線のほうでも取り組みをやられているんだなということを感じることができました。 で、そうした中で、この平日のその時間帯、庄原から備後落合駅まで降りる方は誰もいませんでした。 どころか、またそこでさらに私と同じように、備後落合駅から東城駅に向かって乗られる方も結構いらっしゃったわけでございます。 で、そこにですね、3 つの列車合わせてだいたい 40 人から 50 人ぐらいの方が今集っておる。 平日のお昼間にですね、子供連れの方もいらっしゃいました、おじいちゃんとお孫さんかなというような方もいらっしゃいました。 まあそうした中で、この 3 つの列車をね、やっぱり是非ともこう収めたいわけですよ、せっかく来たんで、一緒になってるところ。 どこに行けばいいんかなと思いましてね。 いやこれせっかくのあれなんだけど、で、なんとなく色々動き回って、時間もあるんで動き回ってみて、あ、ここからなら撮れるなっていうところを、まあなんとか見つけることができたわけなんですけれども、これをさらにですね、コンテンツ化していくこと、例えば備後落合駅をもっとですね、みんなが楽しめるような場所にするっていうことも考えられるんじゃないかなというふうに思うわけでございます。 前回、9 月議会の時には徳永議員がこの質問をされまして、例えば備後落合駅を市の方で買い受けてですね、そこで新たな事業展開をするっていうのはどうか、そこをみんなが集う場所にするっていうのはどうか、ということがありましたけれども、その時の答弁ではなかなかこう、前向きとは言いにくいかなという答弁でもありましたけれど、さらに 3 ヶ月進んで実証事業も進んできた中で、改めて答弁をいただきたいと思います。 **地域交通課長** ご質問にお答えいたします。 備後落合駅について、無償譲渡を受けるかというようなところでございます。 9 月議

会でも答弁の方をさせていただいたところであります。 まあ市におきましても、公共施設の総合管理計画というようなところも立てまして、公共施設の管理のあり方とかいうところも定めているようなところでございます。 まあそうしたところとの照らし合わせというようなところも必要となってこようかと思いますので、そうした議論については慎重に検討して参るべきというふうに考えております。 **五島誠議員** でですね、また今度、備後落合駅から東城駅に向かっていくわけでございます。 初めて乗りました僕は実は。 初めて内名駅を見たり、備後八幡駅を見たりすることがありました。 で、このまた備後落合駅からは少しそれまでと趣きが変わりまして、低速で、で、しかもこう迫り来るしげみと言いますか、狭いトンネルを抜けるところがあったり、非常に高い鉄橋でここはですね、あの、おおちょっと怖いなみたいなところもあったりする中で、速度も非常にゆっくりな区間も多いわけでございまして、しかも携帯もなかなか入りづらい場所も多くありまして、まあちょっと雰囲気が変わるわけでございます。 その中で、なんかインディージョーンズのテーマみたいなものが、これ世界一遅いジェットコースターじゃないかみたいなことも考えたりしながら行ったわけなんでございます。 で、まあなんとか無事にですね、東城駅に降り着きまして、え、帰りどうしようかってなるわけなんですね。 これも今まで散々擦られてきた議論ですよね。 東城まで行って１日で帰ってこれんじゃんないかと、その便ないじゃんっていう話があるんです。 ただそれと僕と同じように、まあさっきも言ったように他の人も、さらには僕は東城で降りたけど、その先、備中神代、新見の方まで行かれたんだというふうに思うんですけれど、この問題もですね、しっかりとこれまでも擦ってきましたけれど、やっていかないといけない部分だというふうに思いますし、やっぱりそうは言っても帰ってこれんわけ、僕は実は迎えに来てくださったすごくありがたい方がいらっしゃって、あのバスで帰らずにその迎えの方の車でですね、また今度は違う場所に勉強に行かせていただいたりしたわけなんですけれど。 冒頭申し上げましたように、私のように、要は芸備線に乗るっていうことだけでも一人旅、一大イベントなわけ でございます。 てなった時に、帰ってこれないっていうのが、その帰る方法、手段っていうのも分かりやすくやっぱり市民の方々にもお伝えしたり、市外の方にもお知らせいただくということが大事なことだというふうに思っております。 で、ここから話を元に戻しますけれども、やはり私がオ伝えしたいのは、先ほども申し上げましたけれど、実証事業で今ものすごくたくさんの事業をやられて、本当に職員の方々の労力も本当にすごいし、市民の皆さんの熱気もすごく感じるイベントもたくさんあったというふうに思っております。 まあただそれに留まってはですね、先ほど申したように、イベントやって終わった、例えば乗車人数がちょっと増えて終わった、てなると、や結局それでもそれとて、まあ大丈夫かというふうな判断をされると、芸備線なくなっちゃうわけなんですもう。 芸備線なくなってほしくないんです。乗ってもはっきり分かりました。 本当にこれは庄原の宝です。 改めてですね、例えばさっきの駅を使うだったり、線路を使うだったり、いろんなことをやりながら、実証事業を呼んでくることはできると思います。 それは JR に使用料払ってでも事

業を行ったりすることだっていいと思います。 そうした様々な手法で、庄原市として覚悟を持って、存続に向けた取り組みを、事業を進めるべきだというふうに考えますけれども、ご所見をいただきたいと思います。 **地域交通課長** ご質問にお答えいたします。 市では現在、この芸備線再構築協議会に入りまして参画しまして、議員おっしゃられるように様々な実証事業に取り組んでおります。 この芸備線の実証事業Aの方ですね、芸備線の可能性を最大限追求するというような取り組みでございますけれど、こちらについては地域経済効果を検証というようなことがあって、定量的価値について調査してみよう、実証事業やってみようというところのものであります。 それとは別にですね、本市としては数値化できないような定性的な価値というようなものもですね、しっかりこの芸備線の議論の中には評価していくべきというようなところの視点も盛り込むようですね、あの事務局である運輸局の方へもですね、求めているというようなところであります。 またこれ以外の多様な価値の創出というようなことにつきましてもですね、今後の実証事業の中でしっかり取り組みをして参りたいというふうに考えております。 またこれと合わせまして、市で独自でやっております様々な利用促進事業というものもですね、まあ予算の限りというものはありますけれど、予算が許される範囲内で引き続き利用促進事業の方を進めて参りたいというふうに考えております。 **五島誠議員** そして様々な事業を行っていただき、なんとかですね存続に向けて、庄原市全体で取り組んで参りたいというふうに思います。 で、覚悟ということでですね、もう庄原市からお金を出してでもやらなければならない事業だったり、そうしたこともたくさんあると思います。 その中でやっぱり権利ビジネスだったり、クラウドファンディングだったり、まあちょっとネーミングのやつは難しいとおっしゃったけど、そうした財源の確保をしながらですね、一般財源ではなくてですね、しっかりとそうした財源を確保しながらやっていき、しっかりと市として覚悟を持って、存続に向けた取り組みを今後行っていただきたいというふうに思います。 最後、副市長のですね、それこそ協議会に出ていらっしゃる副市長のしっかり決意を伺って、質問を閉じたいと思います。 **事務担当副市長** ご質問にお答えします。 まずあの、基本的に芸備線を残したい、これからも将来に引き継いでいきたいという思いは、おそらく庄原市民皆さんの共通の願いでございますので、まずはそこができるだけ実現できるようにですね、できる限りのことをやっていきたいというのが基本的な考え方でございます。 で、その中で、まああの庄原市としてどこまでじゃあ財源を確保しながら、具体的に何ができるのかっていうところは、今この段階でなかなか具体的なことを申し上げることはできなくて、そこはちょっと恐縮に思いますけれど、もう少しお時間をいただいて、来年度の当初予算あたりで少し我々の持ってることをお示しできればなというふうに思っておるところでございます。 ただ一方で、その我々は今、実証事業Aの中で芸備線の持つ可能性を最大限追求するというアプローチでやってきておりまして、できるだけそういう観点から様々な知恵を、我々だけではなくて、国の方であるとか、それから県の方とかの知恵も借りながらですね、やっておるとこなんですけども、果たしてじゃあ我々のやること全て、

芸備線の持っている可能性、先ほど定性的な評価も必要だという話もありましたし、あるいは五島議員の方から様々なこともありましたけども、その中で実際まあやろうとしてもできないこと、例えばクラウドファンディングなんかのことは、これまでもずっとご答弁申し上げているように、なかなか技術的なこともあってできないということがあって、そういう面で言うと、やれることとできないことというのは必ずあると思うんです。 大事なことは、そのできなかったことに対して、それはできなかったから評価をしないのか、できなかったけれども、できたとして評価をするのかとか、まあいろんな評価の仕方はあると思います。 我々としては、やったことが全てということではなくて、できなかったことの中にまあ可能性があるというようなこともイメージをしながら、これからその調査の中身を詰めて整理していきますので、そういったこともですね、しっかり調査の中に、調査をする段階では申し入れをしながら、多面的な本当評価になるようにしていきたいなというふうに思っておるところでございます。 以上です。よろしくお願いします。 **議長**
時間が来ました。終わります。
--- [57:52] 以上で五島誠議員の質問を終わります。 この際暫時休憩をいたします。 再開は午後 2 時 15 分といたします。